

## 北の文脈文学講座

## 『詩誌『亜土』路上派と路上社の歩み』

令和 4 年 9 月 17 日 (土)

講師：工藤浩司氏 (詩人)、安田俊夫氏 (編集・出版業)

工藤氏は「詩とジャズ」「路上派」「詩誌『亜土』の歴史」について、自身のエピソードを交えながら解説した。第二次世界大戦後のアメリカで生まれた「ビート派」は、日本ではジャック・ケルアックの小説「ON THE LOAD」即ち「路上」が由来となり「路上派」と呼ばれるようになったと考えられる。詩誌『亜土』は 1965 年に山田尚と泉谷明によって創刊された。『亜土』は「現代詩の実験工房としての亜土」という言葉を繰り返し書き込み、常に新しい表現に挑戦する姿勢を貫き今日に至る。

安田氏は津軽書房時代から泉谷明らの詩集を担当し、装幀も手掛けている。「路上社」は「路上派」が社名の由来となった。

## ラウンジのひととき

## コントラバス・デュオコンサート

令和 4 年 9 月 3 日 (土)

普段は緑の下の力持ちに徹しているコントラバスで、ゆったりと低音に浸る午後のひとときを過ごすことができた。



## 演奏 Duo Baum

木村裕樹と鈴木愛理による、コントラバスのデュオ。“Baum”は、ドイツ語で「木」のこと。

『佐藤泰志をさがして』  
～函館出身作家の足跡を追う～

令和 4 年 10 月 15 日 (土)

講師：成田清文氏 (教員、harappa 映画館スタッフ)

作家・佐藤泰志は、昭和 24 年に北海道函館市に生まれた。高校生の時から小説を書きはじめ、数々の文学賞を受賞。平成元年までに芥川賞 5 回、三島由紀夫賞にもノミネートされながらも、平成 2 年に自ら命を絶った。村上春樹、立松和平、中上健次と同世代でありながら、新しさや時代性とは違う独自の世界をもつ佐藤の本はすべて絶版となった。

だが、平成 19 年の作品集の刊行をきっかけに、『そのみにて光輝く』『きみの鳥はうたえる』など 5 本の映画が制作・公開。学生時代の友人や同人仲間、函館の同郷人などによる応援・支持が実を結んだのである。成田氏の著書『佐藤泰志をさがして』(令和 2 年)とともに、佐藤泰志がなぜ忘れられたか、いかにして再発見、再評価されたのか、その軌跡を辿った。

## お知らせ



## ・第 8 回ラウンジのひととき

令和 4 年 12 月 3 日 (土)

「一戸謙三を聴く」朗読：ことゆらり

## ・第 8 回北の文脈文学講座

令和 4 年 12 月 17 日 (土)

「新収蔵資料展」講師：櫛引洋一(企画研究専門員)

## ・文学忌 今官一(忌日の 3 月 1 日は無料開館)

令和 5 年 2 月 27 日～3 月 5 日



## ◆無料映画上映会「この道」

令和 4 年 11 月 3 日 (木)

詩人・北原白秋(大森南朋)の半生を音楽家・山田耕柝(AKIRA)との交流とともに描いた感動の作品を上映しました。



(2019 年/配給 HIGH BROW CINEMA)

～参加者アンケートより～

- ・「この道」は名曲ですね。とてもよかったです。
- ・童謡も戦争に影響されたり、二人の出会い等、時代の移り変わりに人生を考えさせられます。
- ・美しい言葉、音楽、人の心を豊かにします。平和な世界が又、来ますように。
- ・白秋と山田耕柝との出会いを知る機会となり良かった。
- ・この日が待ち遠しかったです。感動の時間を持ってました。

◆文学忌～ゆかりの作家をしるぶ  
石坂洋次郎の会 活動終了

令和 4 年、石坂洋次郎の顕彰を目的とした市民団体「石坂洋次郎の会」(事務局・安田俊夫氏)が活動終了となった。石坂の命日である 10 月 7 日に偲ぶ会を開いてきたほか、外部講師を招いた講演会の開催、石坂作品の映画上映会、小説の刊行などを通し、石坂の功績を広く発信してきた。

10 月、同会より『わが日わが夢』(復刊 平成 2 年・路上社) 100 冊が寄贈され、来館した希望者に配布した。本を手にした



愛好者からは、「解散は残念だが、石坂は自分の青春。この本を読んで昔を思い出したい」といった声が多く寄せられた。

# 文学散歩 「詩人 一戸謙三 ゆかりの地を歩く」

令和 4 年 5 月 14 日 (土)  
午前 10 時～

講 師：櫛引 洋一 (企画研究専門員)

ゲスト：一戸 晃氏 (一戸謙三・孫、青森県近代文学館文学資料調査員)

時折小雨の降る天気の中、郷土文学館から弘前昇天教会を望む中央弘前駅まで、謙三ゆかりの地を巡った。主なコースは、文学碑 (藤田記念庭園前庭) ⇒ 弘前図書館 ⇒ 生誕地付近 (NTT 駐車場) ⇒ 万茶ン ⇒ 山道町借間付近 (中央弘前駅)。一戸晃氏の解説は、謙三の日記・書簡等の貴重な資料を元に当時の地図・資料とも照合され、文学散歩の名にふさわしいものだった。



「レリーフ」は、田村進 (彫刻家) 作。津軽方言詩「弘前」の一節にある「五重の塔」、「鴉」の略絵のほか、裏には「弘前」の全文と略歴が刻まれている。一戸氏はこの碑を建ててもらい、「じわじわと後で感激がよみがえってきている」と語った。

⑬ 一戸謙三詩碑 (藤田記念庭園)



謙三の生誕地付近で「ヤマキ一野屋」の全盛期の頃の話をする一戸晃氏。

①

郷土文学館  
● 弘前図書館



今官一の碑を望みながら。官一が『笑いの泉』という低俗な雑誌に文章を寄せたとき、謙三は読んでくれ、先輩とは批判するのではなく励ましてくれる人だと思ったという解説があった。



昭和 4 年創業の珈琲屋「万茶ン」に、謙三はよく通っていた。太宰治や石坂洋次郎なども来店したという。



謙三一家の借間があった山道町界隈。ラグノオの創業者・佐々木繁が謙三の借間をよく訪ねてはフランスの詩人たちの話をきいたこと、佐々木のほかに、福士幸次郎、竹内長雄、笹森猛正などがよく訪れていたという話もあった。



地図「一戸謙三ゆかりの地を歩く (弘前編)」を作成しました。文学館受付で配布中です。

## 参加者アンケートより

- ・一戸謙三のお孫さんからも直接お話を聞けてとても良かったです。
- ・一戸晃さんが同行して下さったことでリアルな一戸謙三を知り楽しい時間を過ごせました。
- ・謙三作品は繊細で美しいと思いました。
- ・一戸謙三の他に今官一、石坂洋次郎、福士幸次郎等お話聞けて色々つながり良かったです。